

都道府県名	大分県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	大分市立植田中学校					
学 年	1年	2年	3年	障害児学級	計	教員数
学級数	4	4	5	0	13	27
生徒数	143	154	193	0	490	

研究の概要

1. 研究主題

生徒の主体的な学びを促す教科指導のあり方

2. 研究内容与方法

(1) 実施学年・教科

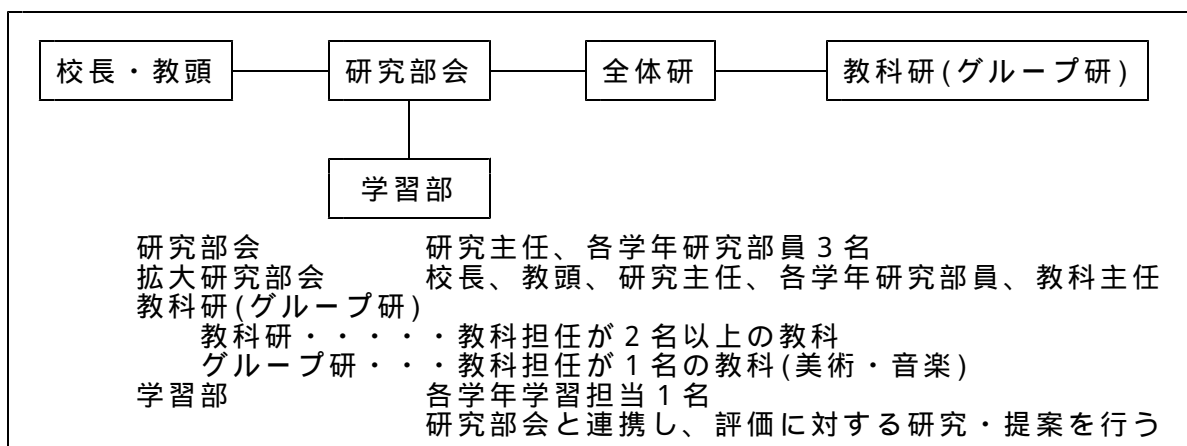
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年生 英語 新しく学ぶ教科の入門期として、きめ細かな指導が特に必要と考えたため。 ・ 1年生、3年生 数学 1年 小学校における理解の状況に差が出やすい学年であるため。 3年 生徒の理解の状況に差が大きい学年であるため。 ・ 2年生 理科 学校として、当該教科に関する研究実績があるため。 ・ 2年生 国語 文法に関する学習が多い学年であるため、きめ細かな指導が特に必要な学年であると判断したため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ 単元指導計画に基づいた指導と評価の工夫を通して研究の見通し(仮説)</p> <p>各教科で指導方法・指導体制の工夫を図り、学習目標に応じた評価基準を設定し、個に応じた適切な支援や評価をすれば、生徒の主体的な学びを促すことができるであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ (習熟度別)少人数授業やティーム・ティーチング(以下、TT)により個に応じたきめ細かな指導をし、生徒の主体的な学びを促す。 ・ 指導目標、評価基準、評価方法等を明記した単元指導計画を作成し、個に応じた適切な支援や評価を行う。 ・ 生徒の変容や学力定着状況を単元末テスト・定期テスト・CRT(新観点別学力検査)、自己評価等を利用して把握し、成果や課題を明確にしていく。
--------	--

平成16年度	<p>テーマ 個に応じた指導と評価の工夫を通して研究の見通し(仮説)</p> <p>学習内容や生徒の実態に合った指導方法・指導体制の工夫を図り、評価基準や評価方法を適切に位置づけ、個に応じた支援や評価をすれば、生徒の主体的な学びを促すことができるであろう。</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学習内容や生徒の実態により、(習熟度別)少人数授業やTTなどの指導方法・指導体制の工夫を図り、個に応じたきめ細かな指導を行う。 ・ 昨年度作成した単元指導計画を見直し、学習内容や生徒の実態に、より適した実践的なものにしていく。 ・ 生徒の変容や学力定着状況を単元末テスト・定期テスト・CRT(新観点別学力検査)、自己評価等を利用して把握し、成果や課題を明確にしながら指導と評価の一体化を図る。 ・ 選択教科における補充学習や発展学習など、個に応じた指導のための教材の開発をしていく。
--------	---

(3) 研究推進体制



平成 15 年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

- (1) 各教科ごとに(習熟度別)少人数授業や T T などの指導方法・指導体制の工夫ができた、これまでの一斉指導中心から個別指導重視の指導へと転換することができた。特に、1 年英語科では年度当初から少人数授業を実施したことで、きめ細かな指導が徹底できたと考えられる。(下記、1 年英語科の定期テスト得点分布参照)

	100~90	89~80	79~70	69~60	59~50	49~40	39~30	29~20	19~0
1 学期末テスト	57	14	6	6	4	3	4	3	2
2 学期中間テスト	54	18	20	1	1	2	3	1	0
2 学期末テスト	25	25	12	13	7	4	4	5	5

単位・%

- (2) 指導目標・評価基準・評価方法等を明記した単元指導計画を作成し、全体研で交流することで、評価内容や評価方法についての共通理解が深まった。

評価基準と評価計画の例(3 年 数学)

5. 「2 次方程式」の評価基準と評価計画

時	評価場面	十分満足できる(A)	おおむね満足できる(B)	評価方法等
1	○具体的な事象を使って、これまでに学んだ 1 次方程式とは異なる方程式(2 次方程式)の存在を意識させるとともに、2 次方程式とその解の意味について考える場面 【関心・意欲・態度】 【知識・理解】	○2 次方程式を学ぶ意味やこれまでの学習との関連を押さえて、2 次方程式の解を調べようとしている。 ○2 次方程式とその解の意味が分かり、1 次方程式との違いを説明することができる。	○1 次方程式では解けない問題場面があることに気づき、2 次方程式とその解を調べようとしている。 ○2 次方程式とその解の意味が分かる。	○準備テスト(診断的評価) ○机間巡視
2	○「 $AB=0$ ならば $A=0$ または $B=0$ 」であることが成り立つことを認識させるとともに、2 次方程式を因数分解して解く方法を明らかにする場面 【見方や考え方】 ○2 次方程式を因数分解を利用して解く場面 【表現・処理】	○「 $AB=0$ ならば $A=0$ または $B=0$ 」であることを利用して 2 次方程式を解くことができることに気づき、その方法を数式的に説明することができる。 ○因数分解を利用して、すばやく正確に 2 次方程式を解くことができる。	○「 $AB=0$ ならば $A=0$ または $B=0$ 」であることを利用して 2 次方程式を解くことができることに気づき、その方法を自分なりに説明することができる。 ○因数分解を利用して、2 次方程式を解くことができる。	○発言・ノート ○小テスト(形成評価)

- (3) 研究仮説の分析と授業仮説を設定することで、全体検証授業で何を検証するのかという共通理解を事前に行うことができた。特に、評価基準 B に到達していない生徒に対する手だてを考えたきめ細かな授業を実施することができた。

検証授業の実施日

国語科 2 年(T T、9 月 5 日)、数学科 3 年(T T、10 月 14 日)

英語科 1 年(習熟度別少人数、12 月 18 日)、理科 2 年(少人数、1 月 26 日)

2. 今後の課題

- (1) 本年度作成した単元指導計画を見直し、学習内容や生徒の実態に、より適した実践的なものにしていく。特に、評価基準Bに到達していない生徒に対する手だてを明記する。
- (2) 生徒の変容や学力定着状況を単元末テスト・定期テスト、CRT(新観点別学力検査)、自己評価等を利用して把握し、各教科の指導方法及び指導体制の工夫・改善との有機的な関連を図る。特に、教科や学習内容の特徴、及び生徒の実態をふまえたものにしていく。
- (3) 選択教科を中心に補充学習や発展学習など、個に応じた指導のための教材の開発をしていく。

学力等把握のための学校としての取組

1. CRT(新観点別学力検査)

- (1)目的 各教科で観点別学力定着状況を全国水準と比較検討するため。
- (2)実施教科 国語(第2学年)、数学(第1学年)、理科(第2学年)、英語(第1学年)
- (3)時期及び内容
国語・数学・理科については、本年度7月に全学年の履修内容で実施した。また、英語科では、本年度3月に当該学年の履修内容で実施予定。

2. 単元末テスト

- (1)目的 各教科で観点別学力定着状況を単元末に実施し、生徒の変容や評価の補正、及び成果や課題を明確にしながら指導と評価の一体化を図るため。
- (2)実施教科 本年度は一部教科のみ実施。来年度は全教科で実施予定。
- (3)時期 各教科の単元終了時

3. 定期テスト

- (1)目的 各教科で学習内容の理解や習得の定着状況を観点別に把握するため。
- (2)実施教科 全教科(技能教科については実施しない場合がある)
- (3)時期 各学期2回

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

1. 公開研究発表会(予定)

- (1)日時 平成16年11月下旬
- (2)対象 管内中学校教職員
- (3)目的 本校のフロンティアスクールとしての研究成果の普及及び研究課題の明確化を図るため。

2. 研究紀要の作成

- (1)日時 平成15年度末、平成16年年度末
- (2)対象 本校教職員及び管内中学校
- (3)目的 本校のフロンティアスクールとしての研究成果の普及及び研究課題の明確化を図るため。

【新規校・継続校】	√ 15年度からの新規校	14年度からの継続校		
【学校規模】	3学級以下 7~9学級 √ 13~15学級	4~6学級 10~12学級 16学級以上		
【指導体制】	√ 少人数指導 その他	√ T・Tによる指導		
【研究教科】	√ 国語 √ 外国語 保健体育	社会 音楽 その他	√ 数学 美術	√ 理科 技術・家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】	√ 有	無		